

第一章 私が体験した朝鮮戦争



歳をとると物忘れが激しい。しかし若いころのことは比較的忘れないと言われている。私は十歳の時に体験した朝鮮戦争を鮮明に覚えており、今も忘れることができない。もちろん、あくまでも自分が記憶している範囲に過ぎないので、ある意味では正確ではないかも知れない。詳しい部分があったり、忘れ去ったものもある。ただ当時の私は辛く、怖く、そして面白いなどの混乱した心理状態であった。そして、「戦争は絶対にいけない」といような反戦倫理みたいなものもなかった。

一九五〇年六月二十五日、日曜日の朝のことだった。その日は三十八度線付近の軍人の行列か何かを見に行く予定だった。母に起こされ朝飯を食べていると空を裂くような爆音がした。目を丸くして、母の顔を見た。爆音はしばらく続いた。後になつて三十八度線以北から南へ鉄砲の弾が飛んだのだとわかった。さらに遠くからは車の走る音と人々の歓声のような音が聞こえた。父は「避難」しなければならな

いといった。

避難という言葉が父から自然な言葉のように出た。その避難という言葉は戦前から使われていたのだろうか。私には不思議な言葉として聞こえた。

父は姉と私だけをまず避難させ、自分は状況を見て後から行動すると言うと、母と一緒に家に残った。

姉と私は、親族とともにソウルへ向かって出発した。ソウルまでは大体韓国の百里（四十キロ）。日本の一里は四キロであるが、韓国では十里が四キロである。その距離を避難民の群れと一緒に歩いた。

砲声は間歇的に遠くから聞こえるが、敵からは遠ざかったという感がある。私の故郷とソウルとの間には地方都市である議政府があり、その近くに道峰山という山がある。私たちはその麓で一晩野宿することにした。虎のような山猫らしき野生動物が怖かったが、それより怖いのは砲弾の爆音であった。

ソウルの叔父の家には翌日に着いた。私たちが到着してみると、もうすでに田舎から避難してきた親族の数家族で満杯であった。さらにその翌日私の母も到着し、

状況は深刻であることを知った。避難はこの叔父の家を一応の目的地にしていた。

夜になって叔父が職場から帰ると、集まっている人が多いので驚いていた。彼は日本植民地時代から警察官をしており、戦後も続けて警察署に勤めていた。親族の中では一番出世したとされていた方で尊敬されていた。しかし叔父は、私たちが戦争で避難してきたという言葉を通じてくれず、「一晩泊まって明日は帰れ」と言った。その言葉から冷たさと同時に戦争の不安から解放されたような感覚があった。なぜなら警察は情報に詳しいと信じていたからである。

しかし、その夜はソウルまでが戦場になった。夜中に砲声が闇の空を裂いた。ソウルの東から西へ大砲の爆音と人の騒ぎ声が聞こえてきた。これは大変だと思いつながら叔父の家に泊まった。砲声はどんどん激しくなった。大砲の玉が頭に落ちるような感じがしたが、綿製の布団は防弾性があると信じて、板の間の下にもぐって布団を被り、ずっと不安におびえながら耐えていた。

翌朝、その家で泊まった人たちはいつの間にか避難して出て行き、誰もいなかった。びっくりして自分たちもすぐに避難しようとしたが、その時には家主である叔

父の家族もすでにひそかに消えていた。結局最後に残った私たちは、わが家で兄弟のように育ち、一緒に逃げてきた従兄夫妻と避難することにした。

母は父からもらったお金を腹巻に入れていた。歩いて漢江の岸边に着いたが、漢江の橋は韓国側が爆破して壊れていたので渡れない。渡り小船を高い運賃でチャーターして渡った。

川を渡った所に、一人の中年の男性が濡れたまま慟哭していた。渡り船が転覆して妻と子供は流され、自身は溺れてようやく川から這い上がったという。かわいそうだと思ったが、そのまま通り過ぎた。人の世話をするほどの余裕はなく自分のことだけで精一杯だった。

漢江を渡ったので一安心。途中で他の親族たちとも合流した。その夜、再び大砲の爆音を聞きながら、真っ暗で道もわからないまま、今のソウルの江南あたりにあったネギ畑を走った。大人数だったので、ネギが破れるパンパンという音がして煩かった。敵に知られるのではないかと思ひ怖かった。またある高足小屋の物置の中で野宿したりしたが、群になって休んでいる時サーチライトに照らされると悲鳴をあげ



朝鮮戦争時に戦場になったソウル市内

自宅を出てから四十日が経過した八月初旬、情報によると既に北朝鮮の人民軍が南へ侵入しており戦局は変わることがなかった。これでは避難の意味がないことを知った私たちは、帰郷することにした。

帰路では戦争の不安感より父が無事であるかが心配であった。まずソウルまで百里、さらにソウルから百里を歩く。ソウルから北への大通りには車が全くない。途中ソウルの叔父の家へ寄ってみたが空き家であった。ソウルから北へ行く時、道端で十人ほどの悪臭のする死体が放置されているのを目撃した。死体の臭う処を過ぎる時は蠅が群れて飛びあがる音がした。可哀そうだとか怖いとかという

る人もいて戦慄した。

母のお金がなくなってくると、親族たちはだんだん一行から離れて行った。離れていった親族には裏切られた気持ちであった。最後まで面倒を見てくれた従兄夫妻に感謝しながら一緒に避難生活を続けた。

翌日も南へ避難していった。空中では数機のソビエトの飛行機が米機に撃たれて黒色煙を出しながら落ちるのを目撃した。それは面白かった。

やがて、母が父からもらってきたお金もなくなり、乞食のようにして歩いた。母にお金があるうちは従兄夫妻にも出してあげることができたが、お金がなくなったことで、逆に私たち三人は彼らの負担になった。ある農家の牛小屋で生活をし、従兄は海辺から蜆やカニを取ってきて売りに歩いた。

そしてソウルから百里ほどの京畿道水原の西側の南陽に着いた。そこは北朝鮮の人民軍が中央の道を南進してしまっていたので、安全な場所のように思われた。私たちはそこを避難生活の拠点とし、主に従兄夫妻が農家の仕事をして貰ってくる麦などで暮らした。そこでの生活は一か月以上に及んだ。

感じもなく、ただ臭くて嫌だった。

四十日前に避難した道を逆行して、野宿した道峰山を通る。大きい街だった議政府は一軒の建物も残さず焼けていた。

夜に家の近くまで来た時、わが家の犬が吠えた時から胸がドキドキした。父は家にいた。村中の人から父へのお祝いの言葉があり、慟哭と歓声の中、その夜は宴会が行われた。避難した村人は先に帰ってきており、比較的平和に暮らしていた。途中で私たちから離れていった親族も既に帰ってきていた。父は家族がみな死んだのではないかと思いつながら待ち続けていた。

避難生活は旅であつたとともに、私にとっては貴重な学びの場でもあつた。全く知らない世界の存在を実感することができた。親族は頼りにならないという教訓を得た。私たちは父親の商売によって比較的豊かに暮らしていたが、その金がなくなると他人の負担になる存在であること、無能力者であることを確認した。

従兄夫妻には感謝と申し訳ない気持ちを強く感じた。従兄は実は早く親をなくして私の父が育てていて、戸籍上は養子になっていた。そのため家族として最後まで

面倒を見てくれたのである。

## 北朝鮮時代

朝鮮戦争の勃発後、父は商売がうまくいかず、慣れない農作業をして生計を立てていた。それでも稲作は順調であつた。戦争中には農民が一番自由であり、強いと思つた。軍人は農家に食べ物を求めてきたからであつた。

北朝鮮の支配になって、田園風景は変わらなかつたが、政治的には変化があつた。私たち子供は「長白山の脈、脈……」という金日成將軍歌を歌うようになった。最近北朝鮮を訪問してその歌を聞いた時は実に懐かしさを感じた。

そのほか、村の警察の派出所は人民軍に管理され、面事務所（村役場）が内務所になり、村の人を動員して事務をさせようとした。しかし村民は非協力的であつ



た。おそらく北朝鮮の支配が長くないことを知っていたのかもしれない。その時、協力して勤務すると、後で韓国側から責任を問われる恐れがあったからであろう。父は姉の腕に潰した大蒜を付けて膨らせて病氣だという理由で断った。

わが家から百メートルくらい離れた家の二男が、共産主義者の大学生だった。彼はソウルにある大学の四角い校帽を被っていたが、その帽子は日本植民地時代以来憧れの的であった。彼は、北朝鮮から三十八度線を越えて避難してきた私の又従姉にあたる女性と恋愛関係にあった。

彼は、朝鮮戦争直前に彼女と私にソウルを案内してくれたことがあった。その時私は二人に可愛がられ、ソウルの東洋劇場で無声映画を見せてもらった。弁士の解説を聞くのが楽しかった。他にも、有名な和信百貨店に一緒に行ったこと、中心通りの鐘路の鐘閣をみたことを覚えている。これらは今でも、私にとって良い思い出として残っている。

しかし、このような恋愛は村の歴史上初めてであった。というのも、韓国では伝統的には村外の人と見合い結婚をするのが普通であり、村内婚はありえなかったの

である。したがって、その恋愛は村にとって異様なことだったのだが、相手が「えらい共産主義者」であつたので、文句や意見を言う人はいなかった。

彼は、私の村のような小さい所にとどまらず、広い世界で活躍していたようであり、やがてこの村を去ると再び戻ることはなかった。しかし、残された彼女は恋人が共産主義者であるため、内務所で働くことになった。彼女は内務所員として、間接的には稲や粟までも収穫量を調査したりせざるを得なかった。これが後に大きな禍根を生むことになるのである。

朝鮮戦争が勃発してから三か月の間、村は朝鮮人民共和国の支配によって一時的に平和的な状況を取り戻したものの、まだまだ不安であった。体制は李承晩大統領の民主主義から金日成將軍の共産主義社会の時代に変わったとはいえ、農民にはそれほど政治的な影響はなかった。父は時々情報を持ってきて、夜になると村人と語っていた。李大統領がまた反撃してきて、こちらが「解放」されるとも言った。それは日本から解放された後によく言われた言葉であった。毎晩のようにわが家の板の



国連軍による仁川上陸作戦

間では、李承晩大統領の民主主義か金日成將軍の共産主義か議論が交わされた。村人たちの趨勢はどちらか定かではなかったが、やや李承晩の方へ傾いているような傾向があった。

九月になると、村の田圃や畑には農作物が相変わらず実っていった。その収穫の予想を報告するようになり、行政をする人が直接現れて計算方法を教え指導した。一株の稲の粒を計算して、広さで全体生産量を計算して報告することだけを聞いて、農民たちは日本植民地時代の供出を思い出すように恐れていた。しかし村は平和な状況が続いた。

九月十五日の夜、いつもと同じにわが家の板の間では父方の親族のお婆さんと青豆の皮をむきながら政治の話が交わされていた。その時遠く雷鳴のような音が聞こえた。音に敏感な父が外に出てソウルの方向の空を見上げた。その音と同時にソウル方面の空が曙のように明るさを見せた。父はこれを異様な現象とキャッチした。後に、これがマッカーサーによる「仁川上陸作戦」であったことを知った。そして九月二十七日にソウルが収復されると、国連軍はそのまま北へ進行した。私の村

もその時解放されたはずだが、国連軍を見ることはなかった。国連軍は重要な国道に沿って、北朝鮮の辺境地域まで行ったということの後からわかった。

人民軍が北に向けて歩いて行くのを見た。実は敗戦兵であった。わが家に三名の人民軍が入って、父に砲弾を運んでくれと言いがら食事を要求した。母が急いで応じて接待した。食事後、彼らは急いで北へ行った。父は無事であった。

その晩か次の晩に、二キロ離れた村で家族八人と一頭の牛も含めて全家族が残虐に刀で殺された。その家の息子が韓国軍の将校だから、そのような被害を受けたのである。その

家族はわが家の近所の家の奥さんの実家であった。彼女は実家に行つて虐殺された家族の死体を掘り出して葬式を行った。親の前で子供を刺し殺し、親も殺されたと言っていた。その話は女性から村中に広がったが、恐ろしい状況でそれを非難する人は誰もいなかった。

## 韓国時代に戻った

こうして村は北朝鮮の支配から解放され、自然に李承晩大統領の民主主義体制に移行した。派出所から人民軍が去り、内務所は面事務所に戻った。

その数日後の夜、派出所が襲撃された。逃げられず山に隠れていた人民軍が、夜に山から下りて襲撃したのである。「農民でも安全ではない」と言われたので、私の家族も驚いて、韓国軍が駐屯している鉄道駅前の大通り近くに一時避難して夜を

過ごした。村の青年二人と少女一人が行方不明になったりして、村人の不安は高潮していった。

人民軍に八人の家族を虐殺された韓国軍の将校が帰宅して怒り、村では共産主義へ協力した人を罰するかどうかが問題になった。彼は村の中で北朝鮮に協力した人を捕まえて殺した。一人がシャベルをもって縛った人を歩かせ、土を掘った穴の横に立たせると後ろから銃殺して穴に押し込んで帰った。

私は氷の上で滑り櫓に乗って遊びながら、殺害現場を目撃した。人を殺す場面をみてもそれほど怖いとは思わなかった当時の私は、彼等が帰るまでそのまま遊んでいた。その冬までこのような復讐的な銃殺は続いた。

そんな中、共産主義者の大学生の家が問題となった。本人は村を離れて帰ってこなかったが、大学生の両親と兄がいた。村人は数回集まって家族を罰するか否かについて延々と激論した。その激論の末に、村人として罰することはできないと決着をつけた。それ以来、その家族は村人に感謝し、村の行事には積極的に奉仕するなど村の中で円満に暮らすようになった。それはキリスト教や仏教などの宗教倫理な



どではなく、ただ村人の純粋な良心であった。

しかし大学生と恋愛した女性は罰されることになった。それをまず村人が報告するかしないかの討論が行われた。その夜の討論のさなかに彼女の従兄が洗濯棒をもって彼女の家に走っていき、頭を殴って血を流す事件があった。しかしそれで終わらず、彼女は韓国軍に呼び出されて訊問を受けた。

この女性に対する韓国軍の残虐さは、北朝鮮も米軍もやらなかったひどいものであった。彼女は十数日間というもの、韓国軍の中に留められて不特定多数によるめちゃくちゃな性暴行を受けたのである。本当にかわいそうであった。未婚の処女だったのに、そのために子供は産めない身体になってしまっていた。その後、彼女はソウルへ行き養女をとって一人で育て上げたが、一生を不幸のどん底で隠れるように暮らしたと聞いている。

彼女は当分の間は故郷を訪ねることはしなかったが、しばらくしてからまた度々故郷を訪ねるようになった。誰も心痛い戦争時代のことを意識する人はいなかった。お互いに戦争で傷ついたことも多く、恥ずかしいことも多かったことから寛容精

神のようなものが身についていたのだろうと思われる。

## 中共軍侵入

寒い冬になった。年末年始のころであった。中国共産党軍（中共軍）は人の鼻に穴をあけて紐で繋ぎ引っ張って歩くという噂が回った。恐怖感を持っているところに、深夜の一時か二時にラッパを吹き、鉦などを鳴らす音が音楽のように聞こえた。それは音楽ではなく、中共軍の侵入の行進曲であり、地獄への挽歌のようなものを感じた。私たちは布団の中に服を着たまま入って眠ったか醒めていたかは定かではないが、じっとしていた。大門を叩きながらヨボセヨと変な韓国語で呼びかける声を聞いた。誰も答えなかったが、意外なことにそのまま静かになった。これが中国の支援軍の参戦によって韓国軍が後退したソウルの「一月四日後退」であった。わ

が村はそれより数日早く、一九五〇年十二月三十一日と思われる。

朝起きて見ると、前の山は白い服装の中共軍一色に覆われていた。彼らの軍服は裏表が白と緑の色になっていて冬は雪の保護色として白いほうを表にしている。住民たちはまた南へ避難することになった。中共軍は村人の避難に関しては干渉しない。しかし、避難しなかったら後に韓国側から何か言われるかもしれないという心配があった。中共軍がいつばい山の上のいでも村人はその麓の道を歩いて四キロくらい進んで韓国軍部隊がいるところに着いた。中共軍が侵入していると言っても、韓国軍の人はまともに聞いて信じてくれる人はいなかった。中共軍は非常におとなしい軍隊であり、すぐに撃退するだろうと思いい、その村の空き家で一泊して帰るつもりであった。しかし朝になると中共軍はさらにいっぱいになっていたので、さらにそこから四、五キロ進んだ所まで行き、様子を見て中国人は怖い軍隊ではないこと、避難しなくても同様であろうと判断して帰宅した。

帰宅したらわが家は中共軍で一杯になっており、オンドルに火を入れて暖かいところに頭をつけて寝ていた。母は頭を温めるから頭が悪いはずと言った。そして決

して私には、頭を暖かい所につけて寝ることを許さなかった。

私たちは防空壕で生活することになった。といっても、わが家の後ろに穴を掘っただけものである。白土の穴をホミという草取りの農具で掘り、洗面器で土を外に出して私と母が少しずつ作った。私は自分の初作品のように思い、家より良いと思った。座って時間を待つ分には不便がない。

中共軍は軍隊とは言っても、銃を持っている人はほいなかった。迫撃砲は見たが、個別に武器は持っていない。ただシャベルとか農機具やそのようなものを持っている。私と年齢的にそれほど変わらない軍人もいて一緒に遊んだりした。私の友達と喧嘩になって、泣いた軍人もいた。

彼らは飛行機の音に非常に敏感であり、すぐ伏せてしまう。私はそれほど怖くなかったのも中国人が怖がっているのを見て笑っていた。その中共軍は煙草の普及班であった。私の両親は五十代の初めころであったが、老人扱いされ煙草をもらった。村人の中には漢方薬をもらった人もいた。

彼らは決して女性に関心を見せなかった。噂とは全く違う良い軍隊であった。す

べての軍隊が性暴行を起こすわけではなく、軍の性管理の政策による面もある。中共軍は、私の見聞した範囲では、韓国人女性に対しては強姦などの性暴行は行わなかった。それは中共軍の三つの軍律の一つに「民衆からは糸一本針一本とってはならない」、また八項注意の一つに「婦人をからかわない」という規律があったからと考えられる。

ただ数か月になり、食べ物が足りなく、地域住民たちに食べ物の供出を要求した。しかし住民たちは穀物などを土に埋めて隠した。彼らは鉄棒をもって地面を叩いてみて響きを聴いて掘って探したこともあった。しかし言葉が通じないのでそれ以上のことはしなかった。やさしい軍隊であった。前に経験した北朝鮮の人民軍の虐殺、韓国軍の残虐な復讐に比べるととても良い軍隊だと思った。通訳者もおらず、彼らとはコミュニケーションが全くできなかったが、表情でなんとなくわかったようにしていた。私は自分の家の中を時々覗いてみた。いつも中国の軍人がいっぱい感じであった。

## 国連軍がやってきた

一九五一年の春が過ぎて、初夏になり、農民たちは農作業を進めていた。ある夜軍人たちが移動するのを知った。いつの間にかわが家には軍人が一人も残っていない。しかし何かが起こりそうで、家族は家に入ろうとせず、そのまま防空壕にいた。父は二十歳の姉を隠すために他村に行って、ここにはいなかった。

飛行機の戦闘機が四機一組で飛行する。中共軍は例外なく伏せるが、私は興味深く観察した。飛行士は前方を斜線で見下ろすのでその視角を過ぎたら安全だとは聞いたが、それはそう思われるのが自然であった。しかしこの飛行機は二機組であり、目の前の山を越えてから上空へ旋回して戻りながら山頂に爆弾を投下した。一瞬赤い火の炎と黒い煙が空を染めた。その飛行機の音がセーセイと聞こえるので私たちはセーセイと呼んでいた。爆弾はビール瓶形であるからビールビンと言っていた。

その次の日、大型の四組の飛行機が何十機にもなって空を飾って、天地が響くような騒音をだす。飛行機の両羽根にはラグビーボールのような黒いものが付いており、それは騒音より異常な不吉な象徴のように感じられた。

村から南に向けて西の河辺に爆弾の投下が午前から始まり、日中ずっと続いた。それは以前に見たことのない大群による乱暴な爆撃であった。しかし、村には影響はなかった。つづいて飛行機が連続的に飛来して、西の方へ爆撃する。その晩は雨が降ったが、爆撃は続いた。

その翌日の朝は晴れて、朝の空に今まで見た爆撃の飛行機とは違ったものが見えた。その飛行機は落下傘を投下した。空から落ちる落下傘は五色燦爛であった。その場面は壮大、美しい景観であった。戦争中にこのように美しいという印象を持つのは不謹慎とも思うが、当時の私にとって戦争に対する現実感がなく、どこか遊びであるかのような錯覚をしていたからである。その感覚は今でも記憶のどこかに残っている。

落下傘で空から降りた軍人たちは、落下傘の色のマフラーをしている。後に「赤

いマフラー」という歌が流行った時に、その落下傘の投下の場面を思い出した。防空壕にいる人々は解放されて出たことを口伝えて知らされた。

落下傘部隊はほぼ十人組の中には黒人、あるいは通訳者のような東洋系の完全武装した軍人などによって構成されていたように思う。彼らは前に銃を構えて慎重に村に向かってきた。その間、空にはヘリコプターが旋回し、中型戦車が村の裏の山にも発砲し、山が燃えていた。山の火事は誰も見ようもしない。夜、銃弾で殺された中国人がまた焼かれたりしていた。村の前の田圃の向かい側には赤い布が引いてあった。それが朝日に美しく光っていた。ある人はそれが飛行機に占領完了地を示す赤線だと言った。

一列十人ほどの軍人たちが、防空壕を一つ一つ安全確認のために手榴弾を投げ入れて爆発させていた。隣村では妊婦が防空壕にまだ残っていた。武装した軍人がある防空壕の前に立った時に突然、防空壕の中から飛び出した妊婦に驚いて発射し、腹部を貫通させてしまった。国連軍がヘリコプターを呼び、病院に運び手術を受けて一か月ほど後に帰宅したが、赤ちゃんは死亡したという。また、防空壕にはまだ

残っている人がいることに気がついて行ってみた人によると、防空壕の入り口を布団などで強く塞いだので酸素不足による窒息寸前で救出された村人もいたと言う。

当時は米軍とは全くコミュニケーションが取れなかったもので、ただ米軍の動きに注目するだけであった。彼らの行動をみて良い軍人だと判断した。怖さはなく嬉しかった。食料品を持ってくるメッセンジャーのように喜んで迎えた。村人には米軍の煙草とレーションが配給された。缶切りが付いているが、ないものもあって、包丁で無理に開けたこともあった。なんと美味しいことか。しかし美味しくないビールの缶詰も入っていた。

村では前夜の爆撃の被害がわかった。爆撃を避けるために牛を村の後ろの小山に防空用の壁を作って繋いでおいたが、その生まれて間もない子牛のいる雌牛が爆撃を受けて死んでおり、尻の部分がなくなっていた。村ではそのまま放置しておくとう腐るので各自包丁を持ってきて肉を切っていくことにした。村人たちは肉を切って醬油で煮ておいてしばらく食べた。しかしその飼い主のお婆さんは泣きながら餌をもって逃げ回る子牛を呼びながら追いかけるが、なかなかつかまらず村中を歩いて

いた。私は戦争中のもっとも悲しい場面の一つとしてこのことを記憶している。

爆撃を受けている時は、みんな必死に隠れ、もう死ぬんじゃないかという恐怖に震えていたが、それが過ぎるとすごく嬉しい気分になる。例えば、ヘリコプターなどをかっこいいなあという感じで見ていた。ヘリコプターを今の韓国では「ヘルギー」と言うが、おそらく学校教育が始まる前まではヘルギーという言葉はなかったと思う。私たちは、それまでヘリコプターのことをトンボの飛行機という意味の「ジャムジャリビヘンギ」と呼んでいた。

また、戦闘機は「セクセキ」と言っていた。「セーク！」といった飛行音で名前をつけたのであろう。このように、みんな自然に名前をつけていた。この戦闘機が見られるのも当時の私にとっては楽しいことだった。

米軍が十数名亡くなった。その死体はわが家の横に置かれ、ヘリコプターで運んで行った。しかし中国人の戦死者は七十人余りであり、処理が問題であった。村人に埋葬するように指示があつて、父は村人と一緒に藁で死体を縛って一つの穴に数



名ずつ埋めていた。しかし、貯水池の近くや水の中の死体は接近することができず、しばらくそのままにするしかなかった。父の話では中国の時計とか所持品はみな奪われたということだった。死体からものを取る心境は理解できない、それはおそらく軍人の所行であろうと言っていた。

一軒の藁葺き家が爆撃で焼かれた。しかし防空壕の中にいる間のことで、焼かれた灰と炭しか見ることができなかった。実はその家がわが崔家の親族の本家であり、本家には祖母と息子夫婦、そして孫息子七人、孫娘一人の大家族であった。その家が焼かれ、祖先の遺物の笠や祭服など先祖代々伝わる遺品が全部なくなってしまった。

村の中には銃や手榴弾など武器が散らばっていた。私の甥にあたるが同年で友達でもある彼から誘われ、銃をもって防空壕の中で発射を試みたことがある。最初は緊張して怖かったがやってみると楽しかった。銃声で耳が痛かったが、外には音がそれほど大きく出ないので楽しんだ。しかし、治安担当者にすぐ押収されてしまった。集められた武器などは、民家から離れた畑においてガソリンを撒き、ヘリコプ

ターの上から手榴弾を投下して爆発させた。その爆音は戦争の爆撃に聞こえた。住民たちは避難するように走っていた。武器処理であるから、心配せず戻るように言われてようやく戻る始末だった。

## 国連軍の性暴行

最初、村人たちはみんな手を振って、背の高いスマートな兵士たちを歓迎した。だいたい車などこれまで見たこともない村人にとって、大きな部隊が来て、ジープがたくさん来るだけでも大喜びだった。さらに、ろくな食べ物も食べてないところへ、彼らはチョコレートやドロップ、ビスケットをバラまくものだからたまったものではない。彼らから配給された缶詰なども腹いっぱい食べ、村人たちの兵士に対する好感度は日に日に高まった。

しかし、歓迎したとはいえ、村では相変わらず彼らの行動を観察していた。米軍キャンプは村の前の畑と小山に駐屯しており、兵士が二、三人ずつ時々村を徘徊した。時には犬を連れて歩くこともあった。村人たちから見てそれは軍事活動とは思えず、女性を探して歩いているという噂が流れた。

村人の中に怖れと不安が強まり、私の姉は他村に避難した。若い女性は頭にタオルをかぶり、子供をおんぶしていた。若い奥さんたちも狙われるといけないので、手拭いを被り、韓国式の年寄りのかっこうをしてごまかそうとしたが、アメリカ人にはそうは見えなかったようである。子供がいない人はよそから借りてきて、子供をおぶって仕事をしたりしていた。子持ちのほうが襲われにくいなどという話が出たからであった。

その一方で、夜に軍人が村を訪ねることはなかった。彼らも危険を感じたのか、あるいは「夜間外出禁止」だったのかもしれない。

しかし残念なことに、そういう期間は非常に短かった。彼らは村人たちが危惧し

ていた通り、間もなく女性たちを略奪しはじめた。彼らは、昼間に村をぶらぶらしながら女の目星をつけておく。そして夕方になると、坂道などの村を見渡せるところにジープを止めておいて、望遠鏡で目当ての女性を探す。それで見つけると、猛然とジープを走らせてくる。そうして強奪していくのであるが、私たちはそういうジープを見ると、大声で「軍人！ 隠れろ！」と叫んだものである。

ある晩、兵士の一人が性暴行をする場面を見つけて、村人が農器具で彼を殺してしまった事件があった。憲兵が調査に来たが、農民たちは逃げのびた。また部隊移動があったので、その後の捜査もなく済んだ。

そんなことがあっても、米兵たちは軍用犬のシェパードを連れてきて探す。女たちは積んである藁の中に隠れたりするが、たちまち犬に見つけられてしまう。村人が気づいて彼らを取り巻いたりすると、何か捜査をしているようなふりをして行ってしまうが、目を離れたスキに連れていかれた女性がいた。

ある夕方、隣の家で家族が夕食を食べていたときに、隣家の前庭に国連軍の兵士が二人乗ったジープが止まった。私は赤い帽子をみて憲兵であることを知った。関

心をもってジープに近づいてみた。そのときの軍人は、アメリカ人ではなくイギリス人のようだった。隣家には十五歳の女の子がいて、彼らはその娘を目当てにやってきたようである。

その娘は、ビョクチャンという天井のほうにある道具などを入れておく倉庫のような所に隠れていた。私は隣の家まで行って、彼らは何をするのか見ていた。軍人は部屋に靴のまま入ってきていた。一人が障子戸のところに銃を持って立っていて、一人が探す。その娘は見つかりそうになったので怖くなったのだろう、ビョクチャンからパッと出て逃げようとしたところを捕まってしまった。兵士は彼女を捕え、ドアの外側に銃を向けて立っていた。家族は外で震えて立っていた。瞬間的にその家のお婆さんが農具の鉄の熊手を持って板の間を叩いた。びっくりした兵士は娘を放し、急いでエンジンを掛けたままのジープで発っていった。お婆さんは耳の障害者でこれまで差別されてきたが、そんな勇気のある人として改めて評価された。

また、ある結婚したばかりの女性は、畑に肥やしをやっているところを兵士にジープで連れて行かれた。彼女は一か月近く行方不明になっていて、ある日、同じ場所

にジープから下ろされて村に帰ってきた。

襲われるのは若い女性だけではなかった。私より一つ上の十一歳の少年は、お婆さんと一緒にサツマイモ畑で仕事中に兵士が現れ、自分の性器を出すとなめるよう強制された。兵士は、嫌がる彼の頭を抑えて性器を口に入れる。無理矢理口に入れたので口から出血してしまった。そばでお婆さんが大声で泣いているのに、平気でそういうことをやっていた。

その頃、私の父は消化不良の持病を持っていたが、悪化して床に伏すと十日くらいで亡くなった。戦争中であるので伝染病かもしれないということで、葬式は簡略にするという知らせを出した。しかし、父と一番親しかった人は姿を見せなかった。母は「自分が死んで父が生きていたら彼は必ず弔問に来たはずだ」と言っていた。「総理の家の犬が死んだら弔問客が多く、総理自身が死んだら弔問客が少ない」ということわざの通りである。父はこれまで親族や住民たちによく奉仕をしたが、亡くなると人々の態度が変わったと母はとても残念がっていた。特に父の友人が葬式に参加しなかったことには裏切られた感をもった。父の温かい心に改めて尊敬の念が湧

いてくるとともに、私は彼らの心の貧しさを強く感じた。心の貧しい村人が嫌であった。

### 歓迎された売春婦

そのような危機の期間は長くて二か月くらいの期間にすぎなかった。なぜなら村に売春婦たちが入ることによって、性暴行がなくなったからである。しかし売春婦がいる時も、時には強姦の噂はあった。

性暴行にさらされた村にソウルから売春婦がやってきた。彼女たちが村で部屋を有料で借りて売春することを村人は歓迎した。売春婦はだいたい三十人ほどだったが、ほぼそれぞれの家に一人ずつ民宿させていた。村人にとって売春婦の存在は、性暴行から住民を守るだけでなく、部屋を貸すことで現金収入が入るので経済的に

もプラスになったのである。村の全家がそのような状況であった。「売春村」のはじまりである。

戦争は慰安婦がいなければ、暴力的に素人の女性を慰安婦にするような最低の人間をつくってしまうのか。小さな村であるが、そこへ若い女性が入ってくると、村にはがぜん活気が出てくる。米軍のジープやトラックが一斉にやってきて、あちこちに駐車しており、空き地は車でいっぱいになる。そして米兵たちが行ったりきたりしているから、なんとも賑やかで活気がある。米軍の外出がなかったらその日はまるで村が死んだように静かになる。売春婦たちも商売ができないので、明日は来るだろうかと心配して、みんな沈んだ顔になる。

村人たちと売春婦の関係も、一緒に生活していたので、自然に親しくなっていた。

私はそれまで、幼心で売春婦たちに対して非常に不良っぽいイメージがあり、心も身体も最低の女性たちだと思っていた。しかし親しくなってみると、本当に純粋な人が多い。家が貧乏で売春婦になった人が多く、墮落してそうだったとか、倫理

や道徳がどうかということではまったくない。家族と自分が生きるためにやっているものであって、心はダメになっていない。

売春婦の中で「オヤ」「オヤカタ」と日本語でよばれる女性がいた。美貌の彼女は兵士に人気があった。三十人ほどいる売春婦の中でも英語力と貫禄があり、兵士が暴れたりすると解決する能力もあった。

彼女は村から性暴行の危険にさらされた少女を、自分の子供の子守りや家事をしてくれる女中として連れて行った。ソウルでは売春ということを人に言わず、子供を女中に任せて事業をすと言っていた。

また彼女は、売春婦たちから物やドルを集めてソウルで売ったりしていた。さらに、秘密で軍のトラックを借り、乗客を乗せて運賃を取る商売をしたりして、お金を貯蓄して、ソウルに韓国式の家を買った。多くの売春婦は食べることに困難な状況からそれをせざるをえないと感じたが、オヤは事業としているように感じた。恥ずかしくは思ったりしていないようであった。

村人の価値観が大きく変わった。性暴行の恐怖から逃れて安心していたところに、

もう一つの不安な要素が発生した。村の男性が売春婦と関係を持つのではないかと、いう婦人たちの不安があり、また男性は男性で自分の妻が兵士に性売るのでないかと監視したり疑ったりして、家庭不和が生じたのだ。その一方で、女性たちの中には売春婦の洗濯など身の回りの手伝いをして現金収入を楽しんだ人もいた。

貧富の逆転も起きた。隣の家のそば畑に、ある部隊がテントを張って駐屯した。折角苗が出たのに潰されたのだ。それに怒った女性が部隊に行って、激しく抗議した。その事情を、通訳を通して知った中隊長がそれなりの賠償をしてくれた。その女性の前庭にスリークォーター車で煙草や缶詰などが運ばれた。彼女は当時この品物が高く売れることを知って売った。戦争中であり、土地の値段は安い。その品物を売って田圃を買った。彼女は米軍部隊の鉄網状の周りを歩きながらウォシ、ウォシと声掛けて洗濯してあげる仕事もした。夫は少しでも帰宅時間が遅くなると彼女の背中を調べた。米軍に性売ったのではないかと疑いの目を向けたのである。夫婦喧嘩はしばしばあった。村人は彼女を非難するより夫の無力さと妻を外に出さざるを得ないことを非難した。現金収入があるということは以前にはなかった恩恵の



ようなものを感じられたのである。

あちこちにコンドーム、性に関する英語が氾濫した。米兵たちはパパさん（父さん）、ママサン（母さん）、タクサン（沢山）、スコシ（少し）など日本語を混じえて話をした。ハバ（早く）、ワッシイワッシイ（洗濯）、ストップ（中止）、ハロー、オーケイ、イエス、ノー、チャプチャプ（食物）、シューシャインボーイ（靴磨き少年）、ツリコーター（トラック）、カモン（来い）、ガツテムソナビーチ（悪口）、ケーアウ（離れ）、スリップ（寝る、性行為）、スレキボーイ（どろぼう）、ショーツタイム、ロングタイム、オールナイトなどの簡単な英語もよく通じた。そして、チャプチャプ（食物）ストップ（中止）は消化不良のために薬を求めることを表すといったように、ある程度ピジン言語（混成語）的な言葉も現れた。村人も英語を一所懸命に覚えようとした。

私ははじめて缶詰の食品やコーヒーも味わった。商品として価値のあるものは洋タバコ（赤玉と言われたもの）であった。米兵は飲んで歌い、ダンスをした。輪になって一人一人腕組みをしてしゃがんで踊ったりしており、歌は当時のアメリカの

流行歌であった。たまには「シナの夜」なども歌った。

売春に対して米軍のMPは一応取り締まったようだが、私の記憶では一度も村では取り締まられたことはなかった。朝鮮戦争に参戦した米兵たちは「帰休制度」などによって日本を経由して韓国にも日本にも「パンパン景気」をもたらしたのである。一時的ではあるが村は経済的に豊かになり、西洋文化と接する機会も増えた。村の女性は売春婦の衣装に相当影響され、男性は米兵の軍服を作業服にしていた。当時ライターは神秘的なものであったが、特にタバコを吸う老人はライターを貰って喜んだ。

しばらく米軍駐屯が続いたが、部隊が移動してしまった。村は貧困な農村に戻った。売春婦たちは村を離れ、部隊のある所に移った。その後、村は全く前の伝統的な農村に戻ったが、二人の売春婦が村に残った。一人は米兵の子供を産み、もう一人は当時すでに三十歳を過ぎており、ソウルの人と結婚した。彼女らは村に定着することを決め、村人と仲良く暮らした。彼女たちが還暦を迎えた時、村人は大勢集まって祝い、亡くなったときは立派な葬式も出した。そして誰も、彼女たちがかつ

て売春婦であったことを言い出すことはなかった。

米兵の子供はそこで小学校に通って、後にアメリカから混血児を受け入れるという話があった時、強く拒絶した。恥ずかしい経歴はどうであつても子供への母親の愛情は感動的なことであつた。それが住民を感動させた。

村からも他地で米軍の売春婦になった人が三人もいたことが判明した。しかしそれを理由にいじめたり噂したりすることは全くなかった。

戦争が人を成熟させたのかもしれない。悲惨な戦争の中で米軍に近づいて、売春婦に部屋を貸して生きた人々は、外から見れば恥も外聞もないと思われるかもしれない。村人は戦争の悲惨さと恥をお互いに忘れようとした。誰も差別することなく過去を許し、悲惨な戦争を経験した同じ被害者であるという意識があるからか。言い換えると戦争は人を寛容にし、人に許す心を持たせるのであろう。そして差別のない社会になったのであろう。

米軍が撤退した後、村には韓国軍がやってきた。国連軍と交代した韓国軍もひど

いことを大分やっていた。韓国軍は我々の村が一時的であるにせよ北朝鮮の支配下にあったということで、北朝鮮への協力者の摘発をはじめたのは上述した通りである。

三十八度線近くの村では、北朝鮮に連れていかれた人、自分で行った人がたくさんいるので、なにかスパイ事件があると、それを理由にまた暴行される者がたくさん出るんじゃないかと、いつも疑心暗鬼になっていた。戦争は必ず悲劇を生むし、また生涯その悲劇から逃れられないで苦しむ人たちを生む。

そういう事情もあり、私が中学校へ入学した後、母は農地などを売ってソウルに引っ越した。